

## ■ バーンスタイン／交響曲第1番「エレミア」

バーンスタインはアメリカ生まれ、アメリカ育ちだが、両親がウクライナからやってきた移民で、ロシア系のユダヤ人である。シリアスな傾向の作品を代表する交響曲3曲のうち、第1番と第3番は彼の出自としてのユダヤ人の信仰や伝統をテーマに作曲された。「エレミア」とは古代ユダヤの預言者。交響曲第1番はバビロニアによるエルサレム攻略とバビロン捕囚の顛末、そしてエレミアの哀歌を表現している。

バーンスタインは21歳の夏、「ソプラノと管弦楽のためのエレミアの哀歌」を作曲した。その3年後、これを手直して終楽章に据え、ニューイングランド作曲コンクールに応募するべく、急いで書き上げたのがこの交響曲である。コンクールでは入選しなかったが、フリッツ・ライナーがピッツバーグ交響楽団で初演するよう、計らってくれて、1944年1月、自らの指揮で初演した。この時期、ちょうどナチスがユダヤ人を虐殺していたことを想起すると、この作品の意味はさらに重く感じられる。

第1楽章「預言」（ラルガメンテ）はティンパコと弦楽器の不協和音に導かれて、ホルンがユダヤ教の朗誦のカデンツに基づく主題を呈示する。バスクラリネットなど低音を出す木管楽器が「預言の主題」と呼ばれる短い主題を呈示する。中間部（モルト・カルマート）では第1主題を変形したテーマが現れる。再現部になると、まもなくエネルギーがなくなり、弦楽器の保続音の上でクラリネットが冒頭の主題を奏でて終結する。第2楽章「冒涇」（ヴィヴァーチェ・コン・プリオ）は野蛮なスケルツォ楽章。エレミアの預言に耳をかさない異教徒の祭礼である。フルートとクラリネットが2オクターブ離れたユニゾンで静かに奏でるメロディは、安息日の聖書、とくにハフタラ朗誦のモチーフに基づいているという。やがて第1楽章のモチーフが用いられ、クライマックスに導く。第3楽章「哀歌」（レント）はメゾソプラノが「エレミアの哀歌」を、アシュケナジムたち（東欧のユダヤ人）の詠唱旋律で歌い始める。哀調を帯びたモチーフを繰り返しながら、冒頭旋律のユニゾンに至り、静かに終結する。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、

バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、スネアドラム、バスクラリネット、シンバル、ウッドブロック、ピアノ、弦五部、独唱メゾソプラノ

※スコア上の表記